

令和3年度 基礎研究医養成活性化プログラム外部評価委員会 議事メモ

1 日時 令和4年 3 月 17 日 (木) 10:00~12:00

2 場所 On-line 開催 (Zoom)、筑波大関係者は学系棟 4F483 室

3 出席者

外部評価委員:北川昌伸(東京医科歯科大学教授、病理学会理事長)

竹内賢吾(がん研究所病理部 部長)

基礎研究医養成活性化プログラム委員:土屋尚之、野口雅之、松原大祐、
仁木利郎、矢澤卓也

プログラム専任教員:松岡亮太

プログラム事務担当:小林真知子

筑波大学附属病院病理部:中川智貴

事務陪席:廣田春夫、鈴木かほり(筑波大学)

枝昌子(自治医科大学)

金子智明(獨協医科大学)

4 内容

1) 前事業推進プロジェクトリーダーより挨拶 (土屋尚之)

土屋先生より、以下のあいさつがあった。

教育プログラムとしては来年度以降も継続するという方法であると同っておりますので、皆様の忌憚ないご意見と、今後の助言をいただきたい。

2) 内部出席者自己紹介

3) 外部評価委員紹介 (野口雅之)

野口先生より、東京医科歯科大学教授の北川昌伸先生、がん研究所病理部の竹内賢吾先生のお二人に外部評価委員としてお願いした旨、紹介された。

4) 報告及び協議事項

(1) 本プログラムの目的とカリキュラムの最終成果

a) 全体像と筑波大学(野口雅之)

野口先生より以下の報告があった。

「病理専門医資格を担保した基礎研究医活性化プログラム」は、筑波大学と自治医科大学、獨協医科大学が共同で行ってきたプログラムです。平成29年度の大学教育再生戦略推進費「基礎研究医活性化プログラム」が公募されました。目的としては、本事業で基礎医学を目指す意志の減少に歯止めを掛けるとともに我が国の国際教養競争力を強化するため、各大学が連携し、キャリアパスの構築までを見据えた体系的な教育を実施する取り組みを支援することによって、病理学や法医学等の分野における基礎研究の更なる確保や基礎研究の強化を図るものです。

<現状の問題点>

・基礎系のMDの大学院の学生の割合が、全体の医学系大学院における基礎系のMDになると非常に少ないということが問題。(MD=医師免許を持つ者)

・基礎医学論文数は、中国が大幅に増加、韓国、インド、ブラジルが10年間で倍以上伸びを示しているなか、日本は低調

<取組の概要>

・入学者全員に基盤となる病理学教育を行い、日本病理学会の“病理専門医”の受験資格や、本プログラムが独自に認定する“臓器別病理専門医”資格を取得させ、生活基盤の安定も担保しながら基礎研究医を育成する。

<外部へ周知>

- ・Pathology and Clinical Medicine 2019Vol.37 病理と臨床の特集として、基礎研究医養成活性化プログラムの掲載
- ・病理専門医資格を担保した基礎研究育成ホームページへの過去4年間のアクセス3346件（そのうち日本からが96.4%、海外からが3.6%）
- ・第65回日本病理学会 秋季特別総会シンポジウム 約850名参加

<評価>

2019年3月に外部評価委員会の北川先生、落合先生からの問題点は以下のとおり。

- 1、病理専門医希望の研修医の基礎研究離れ
- 2、病理専門医制度研修との同時進行による学生への負担増
- 3、本プログラムの病理学会会員向けのアピール不足（分子病理学研究会との連携ができていない）
- 4、3大学間で自由に研究室を選べる、ことがなされていない。
- 5、臓器専門病理医の認知に向けての活動不足（病理学会を含めて社会へのアピールをどの様に展開するか）
- 6、臨床各科へのアピールの不足による臨床医の獲得の困難性
- 7、卒後の研究先の開拓（アカデミアに残っていただくための就職先は、やはり今後も開拓が必要）
- 8、国際連携が行われていない。
- 9、プログラム終了後の出口

2020年中間報告をして、評価「A」をもらい、文科省の所見は以下のとおり。

【優れた点等】本プログラム開始により、病理学を専攻する大学院生が着実に増加し、研究を開始している。

【改善を要する点等】

- 本プログラムの周知のため、HP等の活用を積極的に進め、履修者の増加やフォーラム等への学外参加者の増加につなげてもらいたい。
- 3大学以外の他の大学への事業の普及・促進、また、成果の公表といった点について、今後、さらに様々なルートを通じた活動が必要である。
- 病理学の研究医養成に加え、死因究明医の育成（法医学の育成）についても、地域の関係機関と連携しながら今後教育プログラムを充実するなど、取組を進めてほしい。

<本プログラムでの主な取り組み>

3大学連携での特色ある取り組みとして、病理学・法医学概論のプログラムを開催した。

- ・第1回目 基礎研究医養成活性化プログラムサマーセミナー2019（8月11日、12日）40名参加
- ・第2回目 基礎研究医養成活性化プログラムウインタースクール2020（1月23日、24日）44名参加
- ・第3回目 基礎研究医養成活性化プログラムウインタースクール2021（1月22日、23日）50名参加

b) 自治医科大学（仁木利郎）

自治医科大学の取り組みについて、仁木先生から以下の報告があった。

- ・自治医科大学アカデミックコースの受け入れ人数
- ・病理医セミナーの開催、広報活動
- ・三大学交流のサマーセミナー、ウインタースクールの参加
- ・大学院コースの継続
- ・運営委員会の開催

c) 獨協医科大学（矢澤卓也）

獨協医科大学の取り組みについて、矢澤先生から受け入れ人数、基礎研究セミナーのご説明があり、筑波大学、自治医科大学とは異なり、私立大学が抱える問題についても以下の報告があった。

- ・病理医過疎県（栃木県）
- ・私立大学は大学院進学が決して高くない
- ・人員の確保が最大の困難であることから、研究室配属制度を利用し、学部生に基礎研究の啓蒙活動を行なっている

全体の結果(野口雅之)

野口先生より、全体の結果について、以下の報告があった。

学生の受け入れ計画ですが、2017年から始まって、2021年度までで合計16名を目標にした。22年度を入れると17名だが、21年度までは14名で2名ほど目標値を達成できていないのが現実です。

2022年度までの学生の内訳は、筑波大学:8名、自治医科大学:5名、獨協医科大学:4名です。

北川先生から三大学に以下の質問があった。

(北川) 専門研修をしながら研究を行うので、学位を取得する学生さんの負担が大きいのではと思いますが、如何でしょうか？

(野口) 筑波大学の場合には、英文論文1本がないと卒業ができないこともあって、少しクリアするのが難しいが、病理専門医研修が彼らの負担になっているとは個人的に思っていない。

(矢澤) 獨協医科大学の場合、診断にかかる時間のウエイトがかなり高く、これは専門医を取得するための勉強量が多いこともあると思う。それと同じように研究の世界もそれなりにレベルが上がってきていると思うので、オーバードクターをさせずに卒業させることは、結構至難の業だと私も思っている。

(仁木) やはり診断業務をやってもらっているので、結構負担はあるかなと思う。

(3) 全期間についての会計報告(小林真知子)

会計報告として、プログラム事務担当の小林氏から以下の報告があった。

予算の配分については、毎年度およそ全体額の二分の一を筑波大に全体の四分の一ずつを自治医大と獨協医大に配分している。5年間のまとめですが、約80%が人件費(59,356,430円)、約15%が備品費(11,286,902円)を占めている。今年度で文科省からの補助金は無くなるが、後は各大学より予算を出してプログラムを継続する予定です。

5) 外部評価委員より講評、助言、討論

外部評価委員の北川先生、竹内先生より以下の講評があり、三大学間で意見が交わされた。

(北川) 全国に見本になるような有意義なプログラムではないかと思う。人件費については、予算を大学から措置していただいて、プログラムの維持ができるように、是非ご尽力いただきたい。見込みは大丈夫ですか？

(野口) 人件費は考える必要はありますが、ある程度は各大学からもサポートされるのではないかと思います。

(仁木) 自治医科大では、今のセミナーの継続は維持させて頂けると約束している。

(矢澤) 獨協医科大学では、ある程度の金額を大学がしっかり出してくれるという確約を得ています。

(北川) ご本人たちがどういうふうプログラムを選んで、印象をもったのかという話も聞かせてほしい。また、今後、彼らのためにどういうキャリアパスがあるのか、そういう道が残せるような体制を構築していただければと思います。

(野口) 北川先生がおっしゃったことは非常に重要なので、学生の声と進路そのものは、ホームページ上で掲載するとともにセミナー等でもアピールしたい。

(竹内) 実際に学生さんがどのようにリサーチマインドを持っていたのかを是非伺いたい。また、プログラムが確立されたモデルケースとして、全国に波及させていくことだと重要だと思う。

(野口) 筑波大学の学生では、リサーチマインドは人によって全然違います。最初からそのつもりで頑張っている学生は良い結果を出しますが、数合わせみたいな感じで16名の中に所属した人は、本当に研究者としてまともになっていけるのかと思うと、人によってずいぶん違いが出てきます。竹内先生に対する答えは、良い学生を入れなければ本プログラムの様な試みは成功しないということだと思います。

(仁木) 自治医科大学では、リサーチマインドを目指すということは、個人によって違いがあるので、一概には言えな

い。また、キャリアパスに関して言うと、残念ながら大学としての予算措置は難しいが、助教のポストに空きがあった。

(矢澤) 最近の学生を見ていると、楽をする成功体験が一回入ると、楽をしてキャリアを積んでいく形になってしまうので、そういう状況を断ち切ることが、多分、日本の病理医を含めた基礎的なことに対して頑張っていく人数を増やすきっかけになると思う。逆にある程度プラスの意味での成功体験が出てくれば、学生たちもまた昔のように頑張る人の増加に繋がっていくのではという希望を持っている。

(野口) 竹内先生のようなご自分の仕事を持っていて、第一線のresearcherであり、productivityな仕事をしている人は、数少ないため、目標になる人がたくさんいれば状況は大分違ってくるとは思う。また、三大学以外との連携については、是非行うべきだと思う。

(仁木) 三大学の交流とか、もう少しガチガチの制度ではなくて、柔軟に外部の施設と交流した方が良いと思う。

(矢澤) 私も同じ考えて、まずは今回、筑波大学、自治医科大学にお邪魔しただけでも、本学の学生には良い刺激になっている。Webではなく、人間同士が会場でディスカッションすることは、すごく刺激になっている。

(野口) 私の所から、がんセンターに行った学生は、すごく伸びています。是非、がん研究所にも受け入れて頂いて、窓口を開けていただければとお願いしたい。

(竹内) 打診してくれば、いつでもこちらは受け入れます。

6) 事務連絡(廣田春夫)

事務陪席者の廣田氏から、最終年度として5年間分の事業報告は5月末を予定している旨、報告があった。

7) 閉会の挨拶(野口雅之)